

張竹坡「批評第一奇書金瓶梅読法」訳注稿 (下)

Annotated Translation of Zhang Zhu-po's "How to Read the
Number One Marvelous Book *Jin Ping Mei* with Commentary" (2)

田中 智行

(37) 『史記』中に年表があるように、『金瓶梅』にも日時が記される。冒頭で西門慶が二十七歳 [1] であるといい、呉神仙の相面で二十九といい [29]、死に臨んで三十三歳という [79]。また官哥は政和四年丙申に生まれて [30]¹、政和五年丁酉に亡くなる [59]。西門慶は二十九歳で子が生まれたのであるからその年は丙申で、三十三歳のときは庚子のはずである。ところが西門慶は戊戌に死んだと描かれる。李瓶児もまた政和五年に亡くなっているはずが、七年と描かれる [63]。これらはすべて作者が故意に齟齬を作った箇所である。なぜか。この書物は他の小説と異なり、三〜四年の間は一日一時と数えられていく。季節に気候はもちろん、誰某の誕生日、誰が何日にやってきて宴に招き、何月何日に誰を招いたか、何日が何の節令でということまで、秩序立ててじっくりと進めていく。もしこの三〜五年間の干支の組み合わせまでもが一条乱れずに排列されていたならば、本当に西門慶のために帳簿をつけてやっているようなもので、世の見目のない者が(『金瓶梅』を誹って) いうようなことになってしまう²。そこでわざわざその年譜を錯乱させたのである。およそ三〜五年の間の描写はこのようにたいへん濃密で華やかである。いずれの日、いずれの節令もくっきり生き活きと描かれていて、生氣なく列挙されてはおらず、端から数え上げることができて、しかもまた鮮やかな色彩により読者の目を眩ませ、本当に一日一日じっくりと進んでいるかのような感覚を与える。これこそが神妙の筆というものである。ああ技法もここまで至れば“化(自然の創造)”というものであろう。まことに千古の至文であり、私はこれを単なる小説として扱おうとは思わない。

(38) 全百回が一回なのであり、視野を広げてひとまとまりとして読まねばならない。それでこ

¹ 官哥の生日は「宣和四年戊申六月廿三日」[30]、「(宣和二年) 丙申年七月廿三日」[39]、「政和丙申六月廿三日」[59]と記述が一定しないが、政和四年としている箇所はない。作品内の他の設定に照らし合わせると、政和六年丙申と考えるのがもっとも矛盾が少ない。

² 『天許齋批点三遂平妖伝』の張無咎序に「その他『玉嬌麗』『金瓶梅』のようなのは、かきこい下女が夫人になったはいいが日々の帳簿をつけることしかできず、家政をとりしきることなどまるで学んだことがないといったところで、『水滸伝』を真似て行き詰ったものである(他如『玉嬌麗』『金瓶梅』如慧婢作夫人、只会記日用帳簿、全不曾学得处分家政、效『水滸』而窮者也)」とある。

そ物語の首尾が分かるのである。

(39) 全百回は一日にして執筆されたわけではないが、ある日ある時に（一挙に）創成されたものである。その創造の時、どのように創成に至ったかに思いを致したならば、内部の多くの（個々の故事の）始末に、多くの構想、多くの（筋の）交錯と取捨が必要とされたことが知られる。

(40) 『金瓶梅』を読むにあたり、それを事実として読むならば騙される。文章として読んでこそ騙されることがない。

(41) 『金瓶梅』を読むにあたり、それを別人の文章として読むならば、やはり騙されてしまうに違いない。自らの文章として読んでこそ騙されることがない。

(42) 自らの文章として読むというのはその通りなのであるが、またそれを自らが構想し始めたばかりの文章として読むに如くはない。まずそのために心を配り仔細に計算をした上で私は騙せないというのであれば、それではじめて（本当に）騙せないことになるのである。

(43) 文章を書くのに大事なものは情と理という二字だけである。いまこの百回の長篇が書かれるにあたって、（そのポイントは）情と理の二文字に尽きる。一人の心中にその人の情と理とを探りあてたなら、その人の伝を得たことになる。（そうなれば）前後に大勢の台詞が混ざり込んでも、この人が口を開けばこの人の情と理が表される。人物が口を開いたら直ちに情と理が表れるというのではなく、その人の情と理とを探り当てるまでは口を開かせないのである。このため十人、百人、千人を描いても、すべて一人を描くがごとくであり、ついに堂々この百回の大作を仕上げたのである。

(44) 『金瓶梅』においては、ひどく慌ただしい場面に限って他の出来事が挟み述べられる。例えば、まだ潘金蓮を娶らぬ先に孟玉楼を娶る場面を挿み〔7〕、孟玉楼を娶る時には西門大姐を嫁がせることを挟む〔8〕。子（官哥）が生まれる際には呉典恩の（西門慶からの）借金を挟み〔31〕、官哥が危篤となると謝希大³の借金を描く〔59〕。李瓶児の死の場面には、玉簫が潘金蓮の（密会を見つけたのを黙っておく代わりに提示した）条件を呑む場面を入れる〔64〕。日取りを選んで李瓶児を葬る段に、六黄太尉などのことが描かれる〔65〕。すべてたいへん慌ただしい中にわざわざ消閑の筆をなしたものであり、才能に富む者でなければどうしてそんなことができようか。その他、武松が西門慶のことを番頭の傳に尋ねるところで、たいへん慌ただしい中に「毎月二両で雇われている」という〔9〕などの文章は、その場で軽い筆さばきにて真实性を求めたのであり、こうした文章構成法の内には数えない。

³ 常時節の誤り。

(45)『金瓶梅』の見事さは、同じ筆さばきを繰返しても、それが重複とならないところである。たとえば応伯爵を描き更に（同様に西門慶の幫間である）謝希大を描くものの、しかし結局のところ伯爵は伯爵、希大は希大で、各人の有り様や口振りは一糸として乱れない。潘金蓮を描き更に李瓶児を描くのは重複ともいえようが、これまた最初から最後まで、二人が付こうが離れようが、その台詞も挙動も、やはり各々一糸として乱れない。王六児を描けばわざわざまた賁四の妻を描く。李桂姐を描けばわざわざまた呉銀児や鄭愛月を描く。王婆を描けばわざわざまた薛嫂、馮媽媽、文嫂、陶媽媽ら口利きの女たちを描く。（尼僧の）薛姑子を描けばわざわざまた王姑子、劉姑子を描く。こうした類はどれも、その見所は、故意に繰り返しをしていて、しかしまた各々が別項目となっていて決して同じではないところにあるのだ。

(46)『金瓶梅』は西門慶を一度も「文」（洗練された）なる筆致で描かない。呉月娘を一度も「頭」らかな筆致で描かない。孟玉楼には「俏」（粋な）なる筆致のみを用いる。潘金蓮には一度も「鈍」なる筆致を用いない。李瓶児には一度も「深」みのある筆致を用いない。春梅には「傲」（尊大な）なる筆致のみを用いる。陳敬濟には一度も「韻」（みやびな）なる筆致を用いない。西門大姐には一度も「秀」でた筆致を用いない。応伯爵には一度も「呆」（ぼんくら）なる筆致を用いない。玳安は一度も「蠢」（愚かな）なる筆で描かれない。そんなわけで各々描写が行き届いているのだ。

(47)『金瓶梅』は冒頭に一人の男と一人の女を配置し、結末にまた一人の男と一人の女を配置する。ト志道と卓丟兒とが冒頭に配置される二人、錦雲⁴と李安とが結末に配置される二人である。冒頭で配置される二人についていうと、（十兄弟の内の）ト志道の欠を花子虚が埋めたと言われる。作者はじかに子虚を出そうとはせず、また十人中九人だけをはっきり描いて一つだけ空席を残し、それを子虚で埋めるという方法もとらなかった。故にまず一人（ト志道）を配してすぐに除き、欠員を作って子虚を出しやすくする〔1〕。また子虚を出すところで、すぐに李瓶児を出すのである〔1〕。もしそうせずに、まず十人の中に子虚を出したなら、李瓶児を出すときにまた筆を費やさねばならない。つまりト志道は子虚のために欠員を空けるための役回りではあるが、同時に李瓶児のためのまくらともなっているのである。まくらであるというなら、命名にこだわる意味などあろうか。どうしても名前が要るなら単に「不知道（知らない）」といえればいいのだ。だからこそ（同音の）「ト志道」と名付けたのである。丟兒については、この人物もまた（その死後かわりに娶られる）孟玉楼のために席を空ける役回りである。孟玉楼を娶る前にこの人物を娶り、孟玉楼を娶ってからはこの人物は“丟”^すて去られるわけである。李瓶

⁴ 正しくは楚雲。西門慶のために苗青が買った揚州衛の或る千戸の娘だが、西門慶のもとに届けられる前に西門慶は死んでしまう〔77,81〕。

児が死んだ際に（西門慶が）今日は棺を守り明日は紙銭を焼き（懇ろに供養し）、女中や乳母が彼女の部屋に詰め、（李瓶児自身も）一度ならず西門慶の夢枕に立つ〔67, 71〕のとはとても比べられない。丟児はまことに脳裏から“丟”て去られてしまった人物であり、だから丟児というのである。冒頭に配置される者たちは、どちらも一人を追い出して別の一人を招き入れるところに意図がある。結末に配置される者についていえば、楚雲は西門慶の家の彩雲が散じやすい（よい時が続かない）ことを暗示し⁵、また美人はいくらでもいるが人生には限りがあることをあらわしている。死が訪れたなら、西施や王昭君がいたとしても何になろうか。そこで作者は、特に文字を費やしてそのことを証しているのである〔1〕。李安については、韓愛姐と同じ意図で、やはり作者は十二分に肯定的な筆致で、孝子にして正義の人士として描き、黄河の流れにたつ砥柱⁶としている。なぜか。この作品では、上は蔡太師（蔡京）から下は侯林児〔93〕などの輩に到るまで、百人余りではきかぬ人物のなかに一人として善人がおらず、浮気したり媚を売る者でなければ権勢におべっかを使う連中ばかり。もし李安という一人の孝子もなければ、殆ど良心の種が根絶やしになってしまうではないか。李安と母とがよりそう物語を読むならば、実に身を守ることに玉の如く、（親から授かった）髪膚を傷つけようとせぬ孝子である〔100〕。これに引き比べるならば西門慶や陳敬済の輩は、まことに豚や犬にも及ばぬ人物である。そんなわけで、結末部に置いた二人は、大勢を置くことはできないので、それゆえ特にこの二人を置いて、後の人に深省をうながしたものである。

（48）花子虚は冒頭で十兄弟の一人として描かれるのに、どうしてついでに（その妻の）李瓶児を登場させなかったのか⁷。作者は筆を執るにあたり、もとより構想内にすでに李瓶児がいた。構想内に李瓶児がいた以上、その後どのように（西門慶と）密会し、どのように密通し〔13〕、どのように蔣竹山に新たに嫁ぎ〔17〕、どのように西門慶に転嫁するか〔19〕、その布石は既に計算済みで、その上で彼女の夫をどう名付けようか考えをめぐらしたのである。夫には役割に応じた名前をつけるだけのことで、将来居て居ぬが如き存在となるので「子虚」と名付けた⁸。瓶はもともと花のためにあるので、そこで「花」という姓にした。筆を下ろそうという際

⁵ 楚雲の名は、「高唐賦」（『文選』巻十九）において宋玉が楚の襄王に語った「^{あした}旦に朝雲と為り暮に行雨と為る」巫山の神女を連想させる。

⁶ 原文「中流砥柱」。「砥柱」は現在の河南省三門峡市にあった山の名。黄河の激流中に柱のように直立していた。「中流砥柱」は『晏子春秋』諫下に典拠をもつ表現で、周囲に流されることなく孤高を保ち世を支える人物をいう。

⁷ 第47則に「子虚を出すところで、すぐに李瓶児を出す」とあるのに矛盾するようであるが、第一回では伝聞のなかに花子虚の妻として登場するだけで、本人が描かれたり、李瓶児という名前が出されることはない。

⁸ 子虚はもともと司馬相如「子虚賦」（『文選』巻七）で烏有先生、亡是公と問答をする人物。のちには虚構

になつてにわかには、西門慶の正伝を述べる（という形式をとる）ことを考へついたのであるが、西門慶伝を述べる中で李瓶児を出さないならば、どうやつてこの案件を導入すればよいのか。

（かといつて）李瓶児のことを取り立てて述べて、西門慶について述べる冒頭で「隣は花某の家で、その妻は李某といふ」と述べるようなことが、どうしてできるであろうか。そのような筋道のつかない部分はどうしても入れるわけにいかない。それなら潘金蓮が西門慶の家に入るのを待つてから述べてはどうか。これが他の小説であれば、一件また一件と述べ進めていき、途中で新たに筆を起こすであろう。ただ『金瓶梅』だけは、まったくの太史公（司馬遷）の筆法で書かれている。龍門（司馬遷）の文章で、或る篇において特に気を留めて描かれ、且つ文章全体の八割方までがその人を描くような人物について、開巻の冒頭において、衣服の襟・花^{うてな}の帯のように要所のあらましを述べなかつたなら、太史公の文といえるであろうか。この頃の人が伝奇劇を作るにしても、冒頭の数折で主要な人物たちについて触れるであろう。海内の奇書たる『金瓶梅』ならば言うまでもないことである。そうであればこそ、作者は、（李瓶児のために）新たに筆を起こすわけにもいかないもので、いきおい兄弟結義の場面を借りて花子虚を導き入れたのである。応伯爵のグループがいて既に西門慶と親しいのでなければ、兄弟がどうして結義することがあろうか。またもし花子虚を（もとから）十兄弟の内においていつも会つてゐるものとして描いたならば、第一回で西門慶が伯爵と会つた際、子虚は二人の顔見知りといふことになり、どうして開口一番「彼の家の後妻（李瓶児）」を持ち出すであろうか。たとへ後妻を持ち出したとしても、どうして突然「うちの庭と壁一枚で隔てられている」などと言ひ、後妻がどれほどすぐれた人物かを言うだらうか。そういうわけで、子虚を義兄弟の一団の外として今日一団に引き込むという手を用ひ、また隣家ということでも西門慶の発言を用ひて李瓶児を出し、隣家ということをはっきりし、表立つて述べることなしに子虚の一家をすべて生き活きと紙の上に現す。ここからまた計算するならば、ト志道の死を用はずして、どのようにして子虚を一団に引き込む手段を思ひつけるであろうか？ 作者はまったく神業のような筆で文を進めており、故にさまざま曲折があつても、読者の目を眩ませるだけで、秘法を用いたことを窺はせないのだ。だからこそ私は、これがまったく龍門の文章であると言ふのである。このような文章に接するたびに、私はすべての精神を注ぎ、曲折を経て、その始まりから終わりまで行き来するのである。それは五岳三島に入り奇勝を見尽くすのと何ら異ならない。私は心からこれを楽しみ、疲れたりはしないのである。

や事実でないことを子虚と称した。

(49)『金瓶梅』ではたとえ一つの笑話、一つの小曲であっても、すべて時宜にかなっている。あるいは直截にその回の意図するところをあらわし、あるいは前回は補足し、あるいは次回を暗示する。その箇所の下に個別に割り注（夾批）を施すことにする。

(50)『金瓶梅』という書物には、作文の技法で備わらぬものとてないが、一度に詳細に説明はし難いので、当該回の前ごとに（回前評で）明らかにすることにする。

(51)『金瓶梅』において、淫猥な描写は潘金蓮と王六兒の箇所が多く、次が李瓶兒で、他は呉月娘と孟玉楼は各々一度だけ、春梅についてはちょっと描き込むのみである。何故か。呉月娘（の房事）を描くのは「雪を掃く」前の一夜のみで〔21〕、これは呉月娘と西門慶とを悪く描いているのである。孟玉楼（の房事）を描くのは彼女が焼餅を焼く一夜のみで〔75〕、孟玉楼の鬱屈を表し、またそれによって西門慶を悪く描いている。両者はどちらも（呉月娘や孟玉楼の）淫蕩を描くという趣旨ではない。春梅に至っては、後で運勢の反転を演じさせる（身分を急上昇させ呉月娘と逆転させる）ためには節度を保たざるを得ず、それで（房事を）ぼかして描くだけにしたのだ。とことん恥知らずでまったく堪え難い、李桂姐や鄭月兒も口にできないようなことは、すべて潘金蓮や王六兒の口から発される。その堪え難い描写は何のためなのか。これは作者が、かくも畜生のごとき有り様の西門慶を厳しく断罪しているのである。おまけにずっとそれを楽しんでいるというのは、まことに人でなしである。故に王六兒と潘金蓮とがある日ともに手を下して西門慶を死なせる〔79〕。これが作者の深意である。李瓶兒については、忍耐をよくするとはいえ、自ら苦境を招き寄せ、他人の事には関わらない。花子虚を怒り死にさせ〔14〕密通し転嫁するのは〔19〕潘金蓮と大した差はなく、その醜態を書き立てることを妨げるものではない。ただ李瓶兒は病弱で潘金蓮は残忍なので、李瓶兒の淫を描くことは潘金蓮に比べればややましである。また西門慶が薬を試すことが（李瓶兒の）落命の原因をつくる時から早くも、「女が色を貪れば、他人を害すかさもなければ自分を害す」ということを（作者は）強く主張しているのである〔50〕。ああ恐るべきではないか。宋蕙蓮や如意といった連中には何の品行もあつたものではないので、貶めぬ義理とてない。また王招宣の邸の林太太は、私に言わせれば潘金蓮に悪影響を与えた人物で、（作者が）報いを与えようとする人物であるから、やはり存分に貶めるのである。

(52)『金瓶梅』は細切れに読んではいけない。細切れだとその淫なる箇所しか読まない。だから必ずや数日を費やして一気に読み終えるべきで、それでこそ作者が起伏に富み何層にもなった作品に気脈を貫通させ、それが一本の糸となって全体をつらぬいていることが知られるのであ

る。

(53) およそ人が『金瓶梅』を淫書であるというのは、必ずや彼がその淫なる箇所を読むことしか知らぬのであろう。私がこの書を読むならば、まったく一部の史公(司馬遷)の作品(『史記』)に等しいのである。

(54) 『金瓶梅』を書いた者は、もし忠臣孝子を描く文を書いたとしてもやはり技量を発揮し、その人物の様子を忠実に描き、その人物の魂を捉えて、さらに一篇の忠孝を述べる文章を仕立てたであろう。どうしてそうと知れるのか。彼の姦夫や淫婦の描写から分かるのである。

(55) いま和尚が『金瓶梅』を読んでいたならば人は必ずや責めるであろう。かの和尚もまた必ずや人目を避けて盗み読む。本物の和尚であればこそ『金瓶梅』を読むことが許されるのを知らないのだ。

(56) いま読書人が『金瓶梅』を読んだなら、父母であれ師匠であれ、これを禁じる。自分自身でもまた人前で読もうとはしない。本物の読書人であってこそ『金瓶梅』を読めることを知らないのだ。人目を避けて読むものは、まことに淫書を読んでいるのである。

(57) 『金瓶梅』の作者は善財⁹の化身である。ゆえによろずの束縛を免れ、様々すべてをやり遂げている。善財の化身でなければ夢想だにできぬことである。

(58) 『金瓶梅』の作者は、必ずや転生して菩薩の正果に達することのできる者である。思うにそれは、作者の立言がまことに麒麟の角、鳳凰の嘴のような(すぐれた)文章だからなのである。

(59) 『金瓶梅』の作者は、艱難・困窮や浮世の人間模様をつぶさに経てきたに違いない。世間を知ることが最も深くなければ、様々な役柄をありありと描き出すことはできない。

(60) (しかしながら)『金瓶梅』を創作するのに、もし(作中の)あらゆる役柄を遍く経験しないとこの本が書けないというのであれば、『金瓶梅』は完成されることがなかった。どうしてか。諸々の淫婦に間男のようなのも様々異なるのだから、もし必ず自ら体験しなければ分からないのであれば、どうやって経験しろというのであろうか。ここから、才子に通ぜぬ所とてないのは、一心(の働き)によればこそであると分かるのである。

(61) 一心(の働き)によって(ある役柄に)通じたとして、本当に(役柄に)なりきらなければ、その人物の口から語らせることはできない。さすれば諸々の淫婦を描くのは、まことにそ

⁹ 底本「善才」だが「善財」の誤りであろう。長者の子として生まれた善財は、五十三名の善知識を歴訪して菩薩となった(『華嚴経』入法界品)。

それぞれの淫婦の身になりきり、(それにより) 読者に教えを説いているのである¹⁰。

(62) この作品でおおよそ描写のある箇所は、それぞれ人情を尽くさぬところとてない。さすれば、(作者は) まことに百にも千にも身を変じ、様々な人物になりきって、(それにより) 読者に教えを説いているのである。

(63) それぞれ人情を尽くすにあたっては、それぞれ天道を得ぬところとてない。太古の昔より教え上げるならば、天が貪欲な者に禍を、善なる者に福を与え、権柄なる奸臣を転覆させることは確かにこのようである。『金瓶梅』を読むと、まるで誰か一人の者が親しく筆を執り、清河県の役所前の西門慶の家で¹¹、大から小まで、前から後まで、皿から碗まで一々記したのであり、本当に作中の出来事があったようで、筆を操り紙を敷いて創出したとは思われないほどである。だから私は「天道を得ている」といったのである。

(64) 『金瓶梅』を読む者は、白描(輪郭で描く)した箇所に注目すべきである。後学がその白描した箇所に注目できたなら、必ずや自らも、(描写を) 並外れに節約して巧みな文章を作り出せるようになるであろう。

(65) 『金瓶梅』を読む者は、次の場面へと移る箇所に注目すべきである。後学がその飛ばされた箇所に注目したなら、必ずや自らも技量を伸ばし、(次の場面へと) 橋渡する文章を書けるようになるであろう。

(66) 『金瓶梅』を読む者は、作者が(創作上の) 厄介事を避けているところに注目すべきである。厄介事を避け易きに就いている箇所に後学が注目するなら、重い筆を捨て軽い筆を用い、並外れて賢く楽をできるようになるであろう。

(67) 『金瓶梅』を読む者は、楽々とした手つきで面倒な事件が書かれている箇所に注目すべきである。後学がこの技術を習得したならば、複雑な文章を書けるであろう。

(68) 『金瓶梅』を読む者は、物語が交差するところに注目すべきである。後学がこの技術を習得したならば、きらびやかで目を眩ますような文章が書けるであろう。

(69) 『金瓶梅』を読むには、(筋の) 帰結点と発端、鍵となる箇所や呼応する点を見なければならぬ。後学がそれを習得したならば、やっとな『左伝』『国語』『荘子』『離騷』『史記』や諸子の書を読むことが許されるのである。

(70) 『金瓶梅』を読むには、(作者の) 意を用いた箇所を知らねばならぬ。あちらこちらで、

¹⁰ 原文「一心所通、実又真個現身一番、方説得一番。然則其写諸淫婦、真乃各現淫婦人身、為人説法者也」。「現身説法」という仏教語を踏まえている。「現身説法」とは仏や菩薩が諸々の化身の姿を現して法を説くことを言い、のちには自らの経験をたとえに持ち出しつつ道理を説くことを指した。

¹¹ 第一回に、西門慶の父・西門達が「清河県前」に大きな生菓舗を構えたことが記されている。

意を用いた理由となる箇所を見てとれたなら、はじめてその者は『金瓶梅』を読むことを許されるのであり、文章を読めると称して構わないのである。

(71) 幼時、塾で学友が先生に棒で打たれ「私はお前に一文字一文字考えるよう教えているのであり、丸呑みにせよと教えたことはない」と言われているのを見た。私は当時まだ幼かったが、脇でこの言葉を聞いて自らを深く戒め、文章を読み上げる際には、一字ずつを崑曲のように長く伸ばして、何度も戻って読み、必ずや心中でこの文字は自らが書いたものであると思えるまで読むのを止めなかった。中でも覚えているのは「古を好み敏にして以てこれを求む」¹²の一句の文字である。上のようにして三日もせずして、先生が一同に問題を出したのだが、それが「君子は矜りて争わず」¹³であった。答案を書いている間、さほどひるんでいると自分で感じることもなく、文章は完成した。先生は大いに驚いて、他人の作を書き写したのであろう、そうでなければどうしてこんなに進歩が速いことがあるだろうかと思われた。私も申し開きようがなかった。後に先生は注意して私の振る舞いを観察し、私が文章を読み上げるに際して、頭を机に近づけ、片手で文章を指しながら一字一字唱えているのを見ると、大喜びして「お前は私を欺かなかったのだ」と言った。且つ、同窓の連中のほうを振り向いて「お前らはこいつに及ばん」と言った。もとより今とて未熟ではあるのだが、読書の方法について思うには、決して切れ切れに読み飛ばしてはいけない。(正統的な)文章を読むときのみならず、たとえ『金瓶梅』のような小説を読むにしても、切れ切れに読んだのでは蠟をかむような味気なさで、全篇に奥さん連中のおしゃべりがあるばかり、どうして妙文であることが分かるであろうか。文章の妙味に目が行かなければ(作中の)出来事の妙のみを見ようとするであろう。こういうのは大いに嘲笑するに足る。

(72) 『金瓶梅』を読むことは、静かに座すること三月にしてはじめて許される。そうでなければ視界が曇り、稲妻のように(一瞬で)捉えられない。

(73) 文才に乏しいのは粗忽により、粗忽は浮薄による。粗忽なら浮薄であり、浮薄であるほど粗忽になる。名文が書けないのみか、名文を見分けることもできない。こういう手合に出くわしたら、決して『金瓶梅』を読ませてはならない。

(74) 『金瓶梅』を読む前の文章と、『金瓶梅』を読んだ後の文章とで様子が変わらないようならば、その者はさっさと筆や硯を焼べてしまい、犁でもって田畑を耕すのを楽しみとするがよい。再び筆を弄して、自分から辛い目に遭う必要はないのである。

¹² 『論語』述而。

¹³ 『論語』衛靈公。

(75) 『金瓶梅』の作者はまことの才子ではあるが、その学問は結局のところ菩薩のもの（仏教）であって聖賢のもの（儒教）ではなく、思うに専ら人に「空」を教えるものである。さらに一步を進めて「不空」の地歩まで進んだならば、彼の書物はこのようには書かれなかったであろう。

(76) 『金瓶梅』は「空」をもって締めくくられるけれども、見たところ「空」が徹底されているわけでもないのは、孝哥（の濟度）で話が締めくくられることを見れば分かる。ということは、所謂「幻化」〔100〕とは、孝を以てよろずの悪を化することなのである。

(77) 『金瓶梅』には一貫して或る種の憤懣の気がある。であるからには『金瓶梅』（の作者）は疑いもなく龍門（司馬遷）の生まれ変わりなのである。

(78) 『金瓶梅』は過ちを改める書物であり、それは韓愛姐をもって話を締めくくることが見れば分かる。けだし「三年の艾を以て七年の病を治め」¹⁴ようとしたのであろう。

(79) 『金瓶梅』はつまるところ、大いに悟得した人物の作品であり、だから作中、僧侶や尼僧の愚かな行いを逐一描き出しているのである。これでこそまことの菩薩、まことの悟得というものである。

(80) 『金瓶梅』の作者がそのかみ心を決めて、市井を描いたこの一篇の作品を書かなかったなら、趣ある筆致で花や月のように愛らしくなまめかしい、『西廂記』のような作品を必ずや別に書けたであろう。

(81) 『金瓶梅』は文章を書かぬ者に読ませては決していけない。書き手でない者が読んだならば、まことに俗にいう『金瓶梅』を読んだ」というようなことになる。文章を書く者が『金瓶梅』を読んだなら、まったく『史記』を読むのと同じである。

(82) 『金瓶梅』は決して婦人に読ませてはならない。世には、豪勢な帳のなかで優雅にくつろぎながら妻妾に一つの回を読んで聞かせるものが数多いる。男子にさえ（『金瓶梅』が読者を）戒め感じ入らせることを分かっている者は稀であるのに、女子にあって感じ入る者がどれだけいるか（殆どいない）ということ、こうした者は知らないのである。（妻妾が）些かでも作品の真似でもしたら、おそろしいことではないか。作中の文章作法や筆法については、これまた女子が学べるものでもなく、学ぶ必要もない。経書や史書に精通する者がいたとしても、『左伝』『国語』『詩経』や経史を読ませるがよろしい。それなら『金瓶梅』は読むべからざる書物ということになるが、私は何故またそれを批評して世を誤らせようというのか？（そのように問う

¹⁴ 『孟子』離婁上に基づく表現。艾は灸の材料で、長く乾燥させるほど効果が益す。

者は『金瓶梅』が読まずにすまされぬ傑作であるが、婦人にだけは絶対読ませるはいけない書物であると、私が考えていることを分かっていないのだ。人々が（作品の）戒めを看取できずに、逆にこのこと（婦人への悪影響）によって『金瓶梅』を咎めるのを恐れるが故に、予め（上のようなことを）述べて、『金瓶梅』が罪を着させられないようにしたのである。然るに男子のなかで些かでも本を読むことを知っている者で、『金瓶梅』を読まぬ者があるだろうか。読んで喜ぶ者を『金瓶梅』は懼れる。喜ぶべきところを分からずに、ただ淫逸なところを喜ぶのを懼れるのである。そうであつてみれば『金瓶梅』は人を誤らせるが、突き詰めれば『金瓶梅』が誤らせるのではなく人が自らを誤らせるのである。読んで咎めるものを『金瓶梅』は悲しむ。もともと咎められるべきところがないのに、淫逸な箇所を描くのを人が咎めようとする。斯くの如きであるのを悲しむのである。そうであつてみれば、人が『金瓶梅』を誤らせるとはいへ、突き詰めれば人が誤らせるのではなく、『金瓶梅』が誤らせるのでもなく、西門慶が誤らせるのである。『金瓶梅』が人を誤らせる」とはどういうことか。書物をよく読まぬ者は粗忽で浮薄であり、経史を与えても呑みこめず、ただ『金瓶梅』だけを好んで読む。そのうえ『金瓶梅』の後半を読むことはひどく嫌がる。これが「人を誤らせるのは『金瓶梅』だ」ということである。「人が自らを誤らせる」とはどういうことか。人に対して泥棒を教へて、もともと戒めを示そうとしたのに聴き手が逆にそこから泥棒の仕方を学んだとすれば、これは泥棒を教へた者の過ちではない。泥棒を教へた者がもともと泥棒だったのである。だから（同じ理屈で）『金瓶梅』は咎を受けるいわれはない。「人が『金瓶梅』を誤らせる」とは何の謂いか。『金瓶梅』は姦夫淫婦、貪官悪僕、幫間娼妓を描くのに、すべて渾身の力、渾身の説き明かし、渾身の智慧をもってしており、心血をそそいで常ならざる傑作が書かれたのである。いま己に見る目がないというだけの理由で世にこの傑作を淫書と見做させ、高い棚に棄て置かせたならば、前人が心血をそそいでこの傑作を書いたのが——もともと自らの楽しみのためだったとはいえ、実のところ百世千世にわたり錦の文才の主を楽しませようとしたのもあったのに——俗人に覆いかくされて、すべて水の泡となってしまう。これが「人が『金瓶梅』を誤らせる」ということである。「西門慶が『金瓶梅』を誤らせる」とはどういうことか。もし読者が西門慶の事跡として『金瓶梅』を読まずに、まったく自らが今日文章を考える心の働きによって作者のそのかみの傑作を迎え受けるならば、『史記』全篇を読むにも勝るほどにすぐれた読書体験となろう。いちばんわるいのは本を開くや西門慶がどうしたこうしたということしか見ない読み方で、（そのような読み方をする者は）作者の文章を進める上での苦心を全然わかっていない。だから「西

門慶が『金瓶梅』を誤らせる」というのである。そうである以上、読者がこれまで通り西門慶の『金瓶梅』と誤解して読んだならば、作者の『金瓶梅』であることがわからないのである。嘗て或る人が『金瓶梅』を批評して「これは西門慶の一大帳簿だ」と言っているのを読んだことがあるが¹⁵、その者の両の目の節穴ぶりはお笑い草である。彼はいったい何年何月何日に、作者が西門慶の家に雇われて帳簿をつけるのを見たのだろうか。さらに或る人は陳敬濟が「一を弄して双つ（潘金蓮と春梅）を得る」〔82〕段に読み至って、西門慶のために大いに憤って「どうして双つの真珠を持っていかれなければならないのか」と言う¹⁶。この先生もまた読み違えていることに気付いていないのである。潘金蓮はもともと最初から西門慶のものなのではないし、作者がわざわざ春梅を描いたのもまた、西門慶がずっと我が物にしておける人物とすべく描いたのではない。作者が巧みな筆捌きでこの傑作を書いたのであるからには、先生が脇からやみくもに腹を立てることなどないのだ。このように『金瓶梅』を読む者は多いが、きちんと読めない者も多いのである。私は身の程を弁えないので、これを批して教を乞いたいとの願いや切である。作者の腹の底を探り得たとは言わないが、しかし作者が無実の罪を叫んでやまぬので、愚か者とかかわらぬ行いであることは承知で、作者の代わりに（世評と）争うことにしたのである。また文章に志ある者に私と共に長い眠りから覚めてもらい、少しく文章家の法度を補おうと思うのである。それが宜しくないなどと言う者があろうか。

(83) 『金瓶梅』は前後半に分かれる書物である。前半は熱く後半は冷たい。前半は熱中に冷があり、後半は冷中に熱がある。

(84) 『金瓶梅』は西門慶の一つの家を起点に、幾つもの家を描いている。例えば武大の一家、花子虚の一家、喬大戸（喬洪）の一家、陳洪の一家、呉大舅（呉鎧）の一家、張大戸の一家、王招宣の一家、応伯爵の一家、周守備（周秀）の一家、何千戸（何永寿）の一家、夏提刑（夏延齡）の一家である。このほか翟雲峰（翟謙）のようなのは東京（開封）にいるので数えず、番頭の家および行き来のない女性親族も数えていない。これらの家でほぼ、清河県の役人や富家は数え尽くされており、（西門慶）一人を起点に一県全体に描き及んでいる。ああ、一人の「元悪大慝（げんあくだいたい極悪人）」¹⁷というものではないか。この周囲に幾つもの、西門慶が手段を尽くしてひどい災いに遭わせた家があることはさて措く。憎むべきではないか！

(85) 『金瓶梅』で西門慶は一人の親戚もない、つまり上の世代に父母なく、下の世代に子孫な

¹⁵ 注2参照。

¹⁶ 不詳。

¹⁷ 『書経』康誥に基づいた表現。底本は「元悪大慝」に誤る。

く、同世代に兄弟なき人物として描かれる。幸いなのは呉月娘が後添えの正妻の地位に安住したりはしなかったことである。もし呉月娘が潘金蓮のことで（西門慶と仲違いして）ずっと口も利かず顔も合わせなかったならば、西門慶は人として何の楽しみがあっただろうか。それでもなお（西門慶は）自ら過ちを改め身を修めず、好き勝手に悪事を働くのであるから、死んでも悔い改めないのも当然であろう。

(86) 作中に西門慶のたくさんの親戚が描かれているが、すべて仮（義理）^{にせ} 18の親戚である。たとえば喬洪は仮の親戚である。翟謙はなおさら仮の親戚である。楊姑娘（楊おば）というが、いったい誰のおばなのか。ますます仮のおばである。応二哥（応伯爵）は仮の兄弟である。謝子純（謝希大）は仮の友人である。花大舅、花二舅¹⁹に至っては更にお笑い草であり、真とも仮とも決めようがない域に達している。敬済が二度重い喪に服している〔63, 79〕のは、仮の孝子である。沈姨夫、韓姨夫に至っては、その妻がやってきたことを聞かないから²⁰、これも仮の姨夫である。呉大舅（呉鎧）や二舅については、二舅はこれまた幽霊のような蜮（想像上の動物）のような存在である。呉大舅は（実在感という点で）いくらかましで、それゆえ後半ではついに（まともな）出番が与えられるのであり、呉大舅（についての記述）は大まかには前後照応している。西門氏には（慶以外）誰一人としておらず、天の報いもむごく、作者が西門慶を憎むこともまた激しい。（これを思えば）なんと世の人が祖先を同じくする九族（四代前から四代後まで）のうちの親戚を冷淡に見て、排斥し追い出せないのを残念に思うなどは、どういう了見なのであろうか。

(87) 『金瓶梅』はなぜ西門慶をよるべない者として、一人の肉親をも持たせぬ必然があったのか。恐らく必ずやそのようにしてこそ、その始まりの「熱」を滑稽なものとしてあらわし、後文が「冷」となるやとことん「冷」として、二度と「熱」となり得ぬようにできるのである。

(88) 作者は清河県の西門氏をとことん「冷」として、一人の後継ぎをも残させようとしなかった。寓話であるとはいえ、（西門慶のような）この種の人を憎むことは、百年千年の後までずっと、再び燃える灰のひとにぎりをも二度と現させないほどである²¹。ああ作者もむごいものでは

18 「仮」は、真の対義語として「にせ」を表す語であるが、養子を「仮子」というように「義理の」という意味にもなる。

19 李瓶児の前夫である花子虚の従兄弟。ただし四人いる従兄弟のうち、二番目は花子虚本人なので、花二舅なる人物は登場しない。

20 姨夫とは妻の姉妹の夫。沈姨夫の妻は呉大姨（呉月娘の長姉）、韓姨夫の妻は孟大姨（孟玉楼の長姉）と推定されるが、彼らの婚姻関係は作中で明示されない。

21 「再び燃える灰」は原文「復燃之灰」。『史記』韓長孺伝に、韓安国（長孺は字）が牢にあって獄吏に辱められたときに「冷たくなった灰とて、もう一度燃えることはないだろうか（死灰独不復然乎）」と言ったことが見える。

ないか。

(89) 『金瓶梅』中、ひとり李安は孝子であるが〔100〕、他にも王杏菴は義士であり〔93〕、安童は義僕であり〔47,48〕、黄通判（黄美）はよき友人であり、曾御史（曾孝序）は忠臣であり、武二郎（武松）は豪傑であり兄思いの弟である。淫欲にまみれた作品世界にあっても、天命や民の徳が根絶やしになっているとは誰にも言えないのである。

(90) 『金瓶梅』には好人物も多いとはいえずべて男であり、善人の女は一人もない。二人の男を相手にしなかったことで勘定するなら呉月娘ひとは数えられるが、婦道を知って礼もて家をたもつことを知らず、しばしば厄介事の種を蒔く。韓愛姐については、晩節を守ったことはもちろん佳とされるべきであるが、その守った節というのが（陳敬済に対するものであって）まともなものではなく、それ以前の人生（翟謙の妾であった）も潔白とはし難い。他に葛翠屏のようなのは（夫の陳敬済の死後）実家に連れ戻されたが〔100〕、作者はもともとその結末を定めていないのであるから、どうなったか決めることはできない。甚だしいものではないか、婦人の陰の性たるや。貞烈なる者がいないはずはないとはいえ、節操を失うことは容易く、そして（そうした命運は）各人が受ける家の教えにかかっている。こうしてみると、この恐れによって（婦人たちに）模範を示すべきなのであり、家を治める者はどうして慎まずに済まされるであろうか。

(91) 『金瓶梅』には二人の真人と一尊の生き仏²²とが登場するが、結局一人の妖僧の流す害毒から救うことはできない。妖僧とは誰か？ 春薬を施した者のことである〔49〕。

(92) 武大を殺めた毒薬が西門慶の家から持ってこられたものであってみれば、西門慶を殺める毒薬は誰かが（天意を）体現してもたらすことになる。（呉）神仙、（黄）真人、生き仏（普静）といっても、どうして天に逆らって救うことができるであろうか。

(93) 『金瓶梅』を読むには、ぼんやり読んではならない。ぼんやり読めば読み間違える。

(94) 『金瓶梅』を読むには、唾壺（痰壺）を脇に置いておくと、（腹を立てた際に）叩くのにより便利でよろしかろう²³。

(95) 『金瓶梅』を読むには、必ずや座右に宝剣を備えておくべきで、そうすればときに空を切り裂いて憤りを発散させることができる。

²² 二人の真人は呉神仙と黄真人、一尊の生き仏は普静を指す。

²³ 原文「読『金瓶』、必須置唾壺于側、庶便于撃」。「唾壺を撃つ」は『晋書』王敦伝にみえる故事にもとづく表現。王敦は酒を飲むと魏の武帝（曹操）の詩の一節を詠み、如意で唾壺を打ったので、縁がすべて欠けたという。ここから「撃唾壺」が文学作品への感嘆をあらわす表現となり、のちには内心の不平や意気軒高ぶりを表すのにも用いられるようになった。

- (96) 『金瓶梅』を読むには、必ずや明鏡を前に懸けておくべきで、そうすれば全体をあまねく見渡すことができよう。
- (97) 『金瓶梅』を読むには、必ずや大杯を左においておくべきで、そうすれば痛飲して世情の醜悪を消散させることができよう。
- (98) 『金瓶梅』を読むには、必ずや名香を小机に置き、先人（作者）を遥かに謝し、彼が傑作を書き、委曲を尽くして楽しませてくれることに思いを致すべきである。
- (99) 『金瓶梅』を読むには、必ずや机にかぐわしいお茶を用意し、作者の苦心に供えるべきである。
- (100) 『金瓶梅』はまったく禅門の作であり、円通（完全な悟り）の後に法をなしている。私が『金瓶梅』を批評するにも、やはりその円通の箇所を批評している。
- (101) 『金瓶梅』（の作者）はまた、非常な円通に達しているのを（自分で）理解していない。私もまた正に、非常な円通に達しているのを分かっていない箇所を批評している。
- (102) 『金瓶梅』は「空」の字で起結をつけているので、私も作品の「空」の字で起結をつけるところを批評するだけなのである。決して「空」の字をもって我が（儒教の）聖賢をそしろうとするわけではないのだ。
- (103) 『金瓶梅』は至るところで人情と天理とにぴたりと寄り添っている。これは作者が真に悟得していたからであり、その「空」ではないところである。
- (104) 『金瓶梅』は傑出した大作であるが、極めて細かい配慮により作られた作品でもある。
- (105) 『金瓶梅』は人を戒める書物であり、戒律といっても構わない。『金瓶梅』は「入世」（世間に入る）の書であるともいわれるが、一方で「出世」（世間を出る）の書であるといっても、いけないことはないのである。
- (106) 金、瓶、梅の三文字を連ねているのは、作者が自ら（自作を）喩えているのである。作中には多くの春の景色が含まれているが、花の一輪一輪、花卉の一片一片に春の造化のわざが費やされ尽くしている。それらは「金の瓶」に入れられて高潔な人の居室に香りを漂わせ、末代までも錦の文才の主が机に置いて風流を愛でるべきであって、決して粗野な田舎者の枕元に置かれてはならない。ああ金の瓶にさされた梅の花は、すべて人の力によって天のわざを補っているのであり、それはこの書物がいたるところ文章によって造化のわざを我が物としているのと同様なのである。

(107) この本は『殺狗記』²⁴を継ぐために書かれている。あちこちでさりげなく兄弟を描いていること、たとえば何九の弟・何十〔76〕、楊大郎の弟・楊二郎〔93〕、周秀の弟（族弟）・周宣〔100〕、韓道国の弟・いたずら者の韓二〔33〕の如くである。ただ西門慶と陳敬濟だけに兄弟がないのはなぜなのか、思いをめぐらせるべきである。

(108) 孟玉楼が阮（冤）を弾（嘆）くところで始め〔7〕、韓愛姐が阮（冤）を抱えるところで終える〔100〕²⁵。これは作者が胸いっぱい激情の涙を零す先がなく、そこで『金瓶梅』をもって大いに涙を流す場所としたのである。

※本稿は、科学研究費補助金（課題番号 25770134）による成果の一部である。

²⁴ 『殺狗記』は元末明初の徐岷の作と伝えられる南戯。東京の富豪・孫華が実の弟・孫榮を蔑ろにして無頼の義兄弟たちと親密につきあうが、犬の死骸を用いた妻の策により、いざという時には義兄弟たちが頼りにならぬことを知って、孫榮と仲直りする筋。

²⁵ この二人が弾くとされるのは月琴であるが、張竹坡は月琴と阮とを区別していない（第七回回評に「月琴者、阮也」とある）。